

太宰治研究

— 中期〈女語り〉作品群の構造を中心に —

何 資宜

太宰治の〈女語り〉と呼ばれる作品群の殆どは、先行研究

においては、太宰の「女性観」を論じる際に援用されるのみであり、本格的な作品論が少ないのが実情である。本論文では、従来の研究史の偏りを少しでも緩和するよう、中期の〈女語り〉作品群を研究対象とし、同時代の時代背景と文壇思潮を縦糸にしながら、〈女語り〉という手法の持つ意味や、この一連の作品群の太宰文学における位置づけを明確にすることを目的としている。主要な分析結果は次の通りである。

第一章は、「〈女語り〉の発見」と題し、〈女語り〉作品群の第一作「燈籠」と第二作「女生徒」を分析し、「世間」の「眼」への意識が、〈女語り〉という手法の形成に大きな影響を与えていることを明らかにした。先行研究では〈女語り〉の発見に関して、「弱者としての自分を発見」し、「現実社会で敗者となった太宰の心情を表現」した手法と説かれてきた。だが、本章で検証したように、〈女語り〉は、太宰の「弱者」「敗者」としての表現ではなく、むしろ、「世間」（特に批評家）の「眼」を意識しながら、彼らが求めようとしていた「あかる」さや「女性的なるもの」といった要素を逆用し、〈女性〉の口を借りて「世間」を批判しているのではないかと思われる。

第二章は、「文壇の風潮や支配的な〈読み〉への批判」と題し、〈芸術家小説〉と思われる「さりざりす」・「千代女」・「恥」を研究対象とし、当時の文壇思潮や読者の読書慣習と

合わせて分析した。その結果、太宰は同時代の思潮や読者の嗜好を常に意識しながらも、同時にそれに反感を覚え、「小説作法」への自負や不安、時流への抵抗感や迎合を同時に抱えていることが明らかになった。従来、〈私小説作家〉とみなされてきた太宰は、「作家の私生活の、底の底まで剥ぎ出す」とする³同時代の〈読み〉を自覚しながらも、あえて作中に実生活と虚構を交えた描写を施し、読者の〈読み〉に反撥しようとしている。

第三章は、「戦時下におけるスタンス」と題し、太平洋戦争開戦日の昂揚を綴った「十二月八日」や、戦時色が見られる「雪の夜の話」を中心に分析した。また、戦時中における太宰の心境の変化をより明白に把握するため、この二作の前後に発表された作品群、「鷗」・「新郎」・「散華」なども視野にいれながら、作中に現れた戦争への言及を比較して考察した。軍部の力がジャーナリズム界に浸透し始めた昭和十六年、十七年前後に発表された作品のほとんどは、戦後、太宰自身によって抹消され再録されることはなかったが、昭和十八年後半以降に発表されたものは、終戦後に語句の訂正を若干施されながら再録されている。この事實は、「戦時の大概念」に妥協せず、反俗の姿勢を貫いた（磯貝英夫氏）、「戦争に対して、否定を潜めた無視、これが彼の一貫の態度」である、という従来の根強い評価に疑問を呈するのだと考えた。

- (1) 原 子朗 「太宰治における〈をんな〉の言葉」〔国文学〕昭和六十二年一月 十四頁
- (2) 斉藤明美 「太宰治の文体」〔解釈と鑑賞〕平成十三年四月 七十四頁
- (3) 太宰 治 「一歩前進」二歩退却」〔文筆〕昭和十三年八月。ただし引用は『太宰治全集 第十卷』(筑摩書房、昭和五十二年二月) 百十八頁による。